

## 柳川先生と自主ゼミ

鎌 田 繁

(昭和51年修士修了)

大学紛争を高校と予備校の窓から眺めて暮し、今から思えば無気力世代の一期生として駒場に入ったのが昭和45年の春であった。学生運動も空々しく、かといって楽しげなサークルに入ってよその女子大生と遊び回る勇気もなかった。クラスはただ外国語の授業を受けるだけの場所で、毎日授業に出ながら誰ともしゃべらずに帰る日も多かった。それまでも鈴木大拙の著作とか柳田国男や折口信夫の本を読んだりしていたので、印哲か宗教にでも行こうかと漠然と考えてはいた。そして会沢正志斎を面白がったり近松の心中物に感じ入ったり、国学とか漢学とかいう言葉に時代錯誤的にあこがれていた。駒場では内なる無気力から目をそらすため外国語には熱心に時間を割いた。すると不思議なことに南蛮鳩舌を学ぶとそれなりにそちらにも心が惹かれるのであった。成果の程は知らず、幾つもの西欧語に身を沈めることから明らかになったのは、東のことか西のことか、自分がいったい何をしたいのか全く分からなくなったということであった。そんな状態で駒場の一年が過ぎようとしていた。

紛争後の学生対策の一環としてであろうか、当時は自主ゼミとかいって学生自治会が間に入りこういう題目のゼミをして欲しいという単位をつく正規のゼミになるという制度があった。自分の進路が全く定まらない中で、今まで考えていた日本や東方の学問をこのまま続けるのか、或いは新しい関心の西方の学問に魂を売り払うのか、それに結着をつけるべく、小心な学生にしては大胆に、日本の民間信仰のゼミを申し込んだのが昭和46年2月20日土曜日であった。「昨日、民間信仰のゼミを申し込むが、今日それが決った。柳川啓一氏が講師になって下さることになった。いざ、決定してしまうと我ながらぞっとする。重い荷物を負

ってしまった。」という翌日の記録は当時の心のさまを写して余りある。これは一言でいえば自分の進路を決めるためのあて馬に柳川先生に出て来ていただいたのである。この時点では柳川啓一文学部助教授がどんな人なのかも知らず、気むつかしいとつきにくい人だったらどうしようと思いつつ悩んだりしていたのである。

一カ月程経った或る晩、ゼミ案内に載せる文章を書くため柳川先生のお宅に電話したのが柳川先生に触れた最初であった。ダイヤルを回して暫くすると、受話器の向うから「柳川ですが」というやや低めなそしてどことなく暖かみの感じられる声が聞えてきた。それが先生であった。その声でそれまでの一カ月、自分の決断を思い返しては湧き上って来た重苦しい気分が雲散して行くのであった。翌週の火曜日の午後本郷の研究室を訪ね、1時間以上何やかや話をさせていただいた。帰りがけに、何か参考になるいい本はありませんか、と先生に尋ねると、宇野円空著『宗教学通論』を棚から引き出して示して下さい、それを借り出したのだった。

3学期となりいよいよ自主ゼミ開始と思ひ、駒場でゼミ案内を見るときどうしたことか柳川ゼミの名前がない。そこで持ち出し講義「宗教史」で来られた先生と教務課に行き尋ねると、そんなゼミは聞いていないとにべもなく言われ、仲介者のゼミ委員は書類は受け取っているといい何やら訳が分からない。そんな不手際にも何もいわれず、先生は少し遅くなるけれどもこれから案内を出してもいいし、或いは4学期にしてもいいと言って下さった。こちらは出鼻をくじかれ意気沮喪し、「では4学期にして下さい」と言ってしまった。しかし考えてみれば3学期なら同じ日に講義とゼミを済ますことが出来るのに、4学期では態々そのた

めに駒場まで来なくてはならない。当時の自分がしかしそんなことに気づく筈はなかった。

かくて3学期の自主ゼミは流れ、かわりにその秋、昭和46年度2・4学期全学一般教育ゼミナールとして柳川先生の「柳田国男と折口信夫」が行なわれたのであった。

自分の進路決定の手段として柳川ゼミを目論見たのであったが、結論的にはそれでも依然何をするかは定まらず、モラトリアム人間よろしく、西

のことであれ東のことであれどちらにころんでも何とかならうと宗教へ来たのであった。自主ゼミをやろうなどと思いもせず、柳川先生に駒場時代に会わなくとも、結局は宗教に来たのかもしれないが、柳川先生が柳川先生でなかったならば、決して宗教学研究室に足を踏み入れることはなかったであろう。そんなことがあってから既に15年経ってしまった。その先生もこの春で退官される。どうか柳川先生、これからもお元気で。